

資料館だより

第 66 号
2010.9.30

特別展予告

江戸図の世界



安永手書江戸大絵図 乾

港郷土資料館には、みなと図書館特別資料室より平成 15 年度に移管された「旧みなと図書館特別資料室移管資料」が収蔵されています。この資料群は、みなと図書館特別資料室の前身にあたる、三田図書館資料室時代の昭和 37 年（1962）から、港区内をはじめ、江戸・東京に関する絵画・版本・江戸図・地図などを中心に収集された、総計 2500 点を超える質・量ともに充実したコレクションです。

近世の江戸図はおよそ 120 点あり、その中には、現在でも人気の高い『近吾堂板切絵図』、『尾張屋板切絵図』をはじめ、最初の刊行江戸図と推定されている『武州豊嶋郡江戸庄図（寛永江戸図）』（写図）、17 世紀後期、遠近道印によって作成された正確な江戸実測図『分間江戸大絵図』、浮世絵師石川流宣による絵画的な描写の

『江戸図鑑綱目』、もっとも普及した大絵図である須原屋板『分間江戸大絵図』などの代表的な江戸図のほか、現存する最大級の手書き図『安永手書江戸大絵図』（乾 5,550×3,930mm、坤 3,780×2,520mm）など、貴重な資料が多く含まれています。

今年度の特別展「江戸図の世界」では、「旧みなと図書館特別資料室移管資料」をはじめとする館蔵資料を中心に、テーマごとに 7 つのコーナーに分け、代表的な江戸図を取り上げて、それぞれの江戸図の種類や特徴、様式の変遷、歴史的な流れ等について紹介いたします。

会 期：平成 22 年 10 月 23 日（土）

～11 月 28 日（日）

会 場：港区立港郷土資料館

江戸図の精度

—近代図にも匹敵する江戸時代の実測図—

平田 秀勝

(文化財保護調査員)

みなさんは、「江戸図」というと、どのようなものを思い浮かべるでしょうか？

江戸市中全体を一枚におさめ、城や城門、神社仏閣を絵画的に描いた大型で豪華絢爛な「江戸大絵図」、多色刷りで錦絵のように彩られた、見た目にも美しい「江戸切絵図」などをイメージされる方も多いかと思われます。これらの「江戸図」は、華やかな一方、現在の地図とは異なり、フリーハンドで描かれた見取り図的なもの、あるいはあまり正確なものではないといった印象も持たれているかもしれません。

一般的に江戸時代の正確な地図といえば、伊能忠敬(1747 - 1818)と、その門人が作成した日本地図『大日本沿海輿地図』(文政4年<1821>完成)が広く知られています。しかし、「江戸図」に関して言えば、伊能忠敬の時代よりさかのぼること、約150年前の寛文10~13年(1670 - 73)に実測をもとに作成された正確な江戸図『新板江戸大絵図・新板江戸外大絵図』が刊行されていました。

『新板江戸大絵図・新板江戸外大絵図』は、遠近道印(富山藩医・藤井半知と考えられている。医師にして測量家、また蹴鞠師としても活躍したユニークな人物)が幕府の許可を得て作成した、磁北(磁石が北を指す方角)を基準とし、図中の1分(約3mm)が京間5間(約9.85m)となる実測図(約1/3250)で、江戸の町を5分割したことから、通称「寛文五枚図」と呼ばれています。「寛文五枚図」が基準としている磁北は、現在では真北をさすものではなく、しかも年々変化していることがわかっています。「寛文五枚図」の測量が行われた明暦・万治頃(1655 - 61)の磁北は、東に約7度かたよっていました。「寛文五枚図」と内務省地理局『東京実測全図』(明治20年<1887>)との比較を行った

飯田龍一氏によると、「寛文五枚図」の北は真北に対し東に6.5~7.0度かたよっていることがわかりました。また、日本橋通町、日比谷堀から和田倉堀を基準に調査した縮尺の誤差は0.01%未満、交差角度の誤差も-0.5度から2.0度であることが確認されています(飯田龍一・俵元昭『江戸図の歴史』築地書房 昭和63年<1988>)。近代図に匹敵するほどの精度をもつ「江戸図」が、すでに17世紀後期に作成され、販売されていたという事実は、「江戸図」に対する一般的なイメージを覆すものといえます。

平成22年度特別展「江戸図の世界」では、「寛文五枚図」をはじめ、遠近道印が「寛文五枚図」を元に一枚にまとめた実測図『分間江戸大絵図』(元禄13年<1700>)、『改撰江戸大絵図』(元禄16年<1703>)など、さまざまな「江戸図」を紹介します。この機会に新たな「江戸図の世界」にふれてみてはいかがでしょうか。



「寛文五枚図」を元に作成された実測図『改撰江戸大絵図』(部分、当館蔵)。作者は「寛文五枚図」と同様、遠近道印。

邸内社を知っていますか？

竹村 到

(文化財保護調査員)

江戸時代の港区には、多くの大名屋敷と寺社がありました。江戸時代後期の文政年間（1818 - 29）に編纂された『御府内寺社備考』には、現港区域の寺院として 253 の寺院が掲載されています。ここには、増上寺のように徳川家の菩提寺や、大寺院の塔中などは掲載されていないため、実際はもっと多くの寺院が存在したことになります。また、芝神明社や赤坂氷川神社などの神社も数多く記載されていました。

しかし、『御府内寺社備考』に記載されない寺社は、ほかにも複数ありました。それらの多くは武家屋敷内に^{かんじょう}勧請された寺社であり、それらが本来的には江戸の寺社とは区別されていたためです。そうした寺社のことを「邸内社」とか、「邸内鎮守」と呼んでいます。

当区内の有名な「邸内社」として、讃岐丸亀藩京極家の上屋敷内にあった金比羅宮や、筑後久留米藩有馬家上屋敷の水天宮、三河西大平藩大岡家下屋敷の豊川稲荷などが知られています（表 1 参照）。水天宮は、明治 5 年（1872）に現在の中央区日本橋人形町に移転しましたが、金比羅宮は現在も虎ノ門一丁目に残っています。

本来これらの「邸内社」は、それぞれの武家が自身の出身地の^{うぶすながみ}「産土神」などを江戸屋敷に勧請し、江戸における守り神とするためのものでした。しかし一方では、江戸の民衆の信仰対象にもなり、場合によってはその信仰が爆発的

な流行をうむことも多々ありました。

基本的に民衆による武家屋敷内への立ち入りは認められていませんでしたが、武家屋敷の方でも「邸内社」「邸内鎮守」の一般参詣日を定めるなどして、民衆の参詣を部分的に許可していました。結果、多くの民衆がさまざまに「邸内社」「邸内鎮守」への参詣をしていました。このような参詣熱を、天保 10 年（1839）幕府は次のような町触を出して抑えようとしています。

武家屋敷内に勧請の神仏え、他所の者参詣致させまじく候儀、近年みだりにあいなり（中略）縁日等のみぎり、門前屋敷構えはもちろん、最寄え立つ商人のたぐい、さしおき候義決してあいなりがたし（後略）

この町触からは、「邸内社」「屋敷内鎮守」へ他所の者が参詣することは禁じられていたが近年は守られていないこと、しかも縁日の時には露店なども出店されていたことがわかります。

江戸時代の港区には単独で存在していた寺社以外にも、武家屋敷内に勧請された寺社も相当数ありました。それらの寺社も、多くの民衆にとって大切な信仰・観光のスポットだったので、「大名屋敷と寺社」のみでなく、「大名屋敷の寺社」もまた江戸時代の港区を象徴する存在だったといえるでしょう。

【参考文献】吉田正高「江戸都市民の大名屋敷内鎮守への参詣行動」『地方史研究』284 号

【表 1】港区内にあった主な「邸内社」「邸内鎮守」

番号	神 仏 名	所 在 地	現 在 地	大 名 家	参 詣 許 可 日
1	箭弓稲荷	赤坂溜池	赤坂一丁目	武蔵川越藩松平家	毎月1日
2	豊川稲荷	赤坂表伝馬町	赤坂四丁目	三河西大平藩大岡家	毎月午日・22日
3	舩不動	愛宕下	虎ノ門一丁目	近江水口藩加藤家	毎月3日
4	金毘羅宮	虎御門外	虎ノ門一丁目	讃岐丸亀藩京極家	毎月10日
5	水天宮	芝赤羽	三田一丁目	筑後久留米藩有馬家	毎月5日
6	八天宮	葵坂上	虎ノ門二丁目	肥前佐賀藩鍋島家	毎月17日 (但、1・5・9月は祭礼)
7	聖天宮	赤坂	赤坂二丁目	肥後人吉藩相良家	毎月16日

※吉田正高氏作成の表より、港区に関するものを抽出し一部を改変した。

後久洋家具店 彩色図

—図面から見える新橋・芝 家具業—

川上 悠介
(文化財保護調査員)

平成 22 年 7 月 2 日から 8 月 18 日まで、コーナー展「芝家具彩色図 昭和初期の洋家具デザイン」を開催しました。本展では平成 21 年度にご寄贈いただいた昭和戦前期の洋家具図面の一部、15 点を展示しました。これらは、芝区田村町五丁目（現・港区新橋五丁目）にあった後久洋家具店が作製したものです。

今では想像もできませんが、明治期から昭和 40 年代までの新橋・芝地域には、多くの注文家具製作者が集まっていました。戦後ではありますが、周辺で作られた家具を「芝家具」と総称する言葉も生まれます。

新橋に家具業が集まった理由は、周辺に多くの洋風建築が建設されたことがあげられます。区内には、現在でも戦災・バブル期の開発などを免れた戦前期の貴重な洋風建築がいくらか残されていることからもうかがい知れます。

新橋の家具業は、「お店」と「下職」で構成され、「お店」が仕事の受注、依頼主との打合せ、家具の組み付けを行っていました。「下職」は「お店」からの注文を受けて自分たちの専門部位を製作します。「下職」は「お店」の周囲に集まり、多くの「お店」があった新橋周辺には、家具職人が集まる地域となりました。

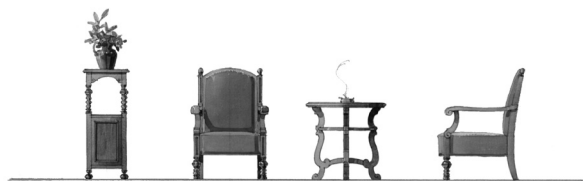
ご寄贈いただいた図面の整理はまだ完全ではなく正確な数字は把握していませんが、概算で 1300 枚を数えます。この中の 600 枚程が彩色を施した図面で、紙質や大きさがほぼ統一されています。それ以外は鉛筆で描かれた色のない図面や青焼き図面などで大きさや紙質も様々です。

これらの図面は、「お店」であった後久洋家具店が大正 14 年から昭和 20 年代半ばまでの間に作製・使用していた図面です。このうち彩色図面は縮尺 1/10 で作製され、着色されたわかりやすい図面であることから、依頼主と家具の色合

いを決めるために使ったものと思われます。一方、鉛筆書きの図面は材質などが記載された縮尺 1/1 の実寸図面で、職人が家具製作時に使ったものです。このほかにも白焼きや青焼き図面があり、戦後まもなくの GHQ 接收住宅向けの洋家具図面、昭和 20 年代の規格化された大量生産家具の図面などが確認でき、新橋にあった洋家具店の昭和初頭から戦後まもなくまでの活動を図面内容から知ることができます。

図面には、応接室用のソファやテーブル、書斎用の椅子や机、寝室用のベッドや棚類、窓周りやカーテン部分、台所周りなどが描かれ、当時の洋家具店がどのようなものを製作していたかを知ることができます。これらの一部には、「北白川宮邸」（葉山）、「山本邸」といった、納品先が図面の題名として記載されているものもありますが、わずかです。したがって、図面の家具類が現存するかどうか、さらには実際に作られたかどうかすら不明で、これらの現況を把握することは難しい課題となっています。

新橋周辺は、太平洋戦争の空襲で焼け野原となりました。木造の店舗が多くを占めていた家具店もほとんどが焼失しています。しかし、後久洋家具店のあった芝区田村町五丁目は数区画だけ被災を免れました。今回寄贈された図面はまさに戦火をくぐりぬけ、新橋・芝地域の洋家具業を今に伝える貴重な資料といえます。



後久洋家具店 彩色図 「応接室家具」

引き続き、後久洋家具店の図面整理とともに芝周辺の家具業についても調査を行う予定です。

齋藤 紀一

—茂吉を見込んだ男—

小澤 絵理子
(文化財保護調査員)

日本の近代歌壇を代表する歌人・齋藤茂吉は、明治40年(1907)9月から昭和20年(1945)4月まで、区内青山を生活の拠点としていました。この歳月は茂吉の満25歳から62歳までにあたり、彼が比較的長く留守にした、大正6年(1917)12月から同10年3月までの長崎赴任(約3年3か月)と、大正10年10月から同13年11月までの欧州留学(約3年2か月)の期間を除いても、31年間余を青山で暮らしたことになります。

茂吉が青山で生活することになったのは、茂吉の養父・齋藤^{きいち}紀一が、青山南町五丁目(現南青山四丁目)に青山脳病院を設立したことによりますが、そもそもは、紀一に秀才を見込まれ、故郷山形県南村山郡(現^{かみのやま}山市^{かなかめ})金瓶から上京して医師を目指し、紀一の命によって次女・輝子の婿養子となる、というプロセスがあればこそそのことでした。いわば紀一は、茂吉と港区をつないだキーパーソンなのです。

紀一は、大変向上心が強く、また先見の明のある人物でした。立身出世をのぞんで書生をしながら学び、医師の資格を取って、埼玉、続いて東京で開業し成功をおさめます。やがて、明治33年(1900)3月に精神病者監護法が公布されると、これに注目した紀一は、さっそく同年の11月、精神病の研究のためにドイツに留学します。同35年(1902)には学位を受けて帰国し、翌36年には神田和泉町に帝国脳病院を設立。さらに青山に土地を求めて、同年8月30日に青山脳病院を開院したのです。

当時の青山は、まだ人家も少なく、田畑の広がる地域でした。そこへ西洋建築を模した巨大な病院が建てられました。紀一自らが図面を引き、出入りの棟梁・大工に建てさせたということです。残念ながら設計図は残っていません。

病院経営の拡張と同時に、紀一は、大勢の書

生を置いて医者になるための教育を受けさせていました。必要な人材を育てるという目論見もあったでしょうが、当時、紀一にはまだ実子に男子がいなかったこともあり、自分の後継者候補として、郷里の優秀な少年を探していたといえます。

そこで白羽の矢が立ったのが、親戚筋にあたる^{もりや}守谷家の三男・茂吉でした。茂吉は明治29年(1896)の春、上山尋常高等小学校を首席で卒業し、同年8月父に連れられて上京、齋藤家に寄宿して医学を目指すことになりました。開成中学、第一高等学校を経て東京帝国大学医科大学に進学。当時のエリート医師としての道を歩みます。紀一には、明治34年(1901)に長男・^{せいよう}西洋が誕生しますが、明治38年(1905)には、まだ9歳の輝子の婿養子として茂吉を入籍しています。後に(昭和2年〈1927〉)自らが院長職を退いて院長を継がせたのは、まだ若くて経験が浅い実子の西洋ではなく、娘婿の茂吉でした。

紀一の先見の明が発揮されたのは、病院経営においてのみではありませんでした。

茂吉の次男である北杜夫氏の著書『マンボウ恐妻記』に、紀一が娘の輝子を諭して、「茂吉はたしかに異常な男だ。しかし、いずれ後世に名を残す男だ。医学は短いけど、文学は長い。お前は茂吉の妻になったんじゃないくて、“看護婦”になったと思え。そうすればうまくいく」と言ったという逸話があります。注目すべきは、これが、まだ茂吉が第一歌集『赤光』しか上梓していない頃であったということと、医師としてよりも文学者としての才能を重視しているという点でしょう。

紀一の言葉通り、茂吉は近代歌壇の巨星として名を残しました。彼が郷里から見出した少年は、単なる秀才ではなかったのです。

幻の試掘坑

—110 余年前の古墳調査—

高山 優
(学芸員)

考古学の世界では、遺跡の有無や残り具合を確認するために、試掘調査あるいは確認調査と呼ばれる試し掘りを行います。この折、試し掘りの目安となる方形または長方形の穴を設定します。一般的に試掘坑と呼ばれるものです（長方形のものを試掘溝と呼ぶこともあります）。

明治 31 年（1898）東京帝国大学（現在の東京大学）人類学教室の主任教官であった坪井正五郎は、考古学研究者の野中完一に命じて芝丸山古墳で試掘調査を行いました。

当時、この様子をつぶさに観察し、記録に書き留めた人物がありました。旧棚倉藩主阿部正功まさことです。正功の見聞記によれば、調査は 2 カ月に及びました。大勢の人々が見学を訪れ、新聞紙上ににぎわす程の一大事業でした。

調査位置は伊能忠敬測地遺功表（明治 22 年建立、昭和 19 年撤去）の前、試掘坑の規模は約四間四方（7×7m）、調査終了間際の掘削深度は 6 m をはるかに超えていました。

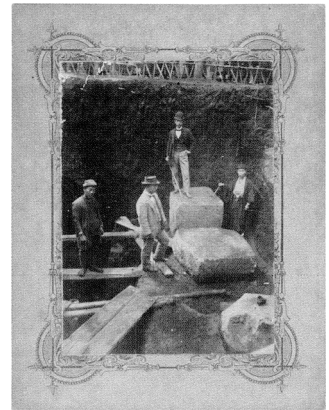
調査成果は、雑誌『考古』（明治 33 年刊）所載の坪井正五郎の報告によって知ることができます。報文によれば、地表面から深さ 2m ほどの位置で四角形に並べられた 12 個の大石が検出され、寛永通宝を含む 12 枚の銭貨が発見されたとあります。つまり、江戸時代に、墳丘上位が大きく削り取られていたことが明らかとなったのです。勿論、埴輪など、調査地が古墳であることを示す遺物も出土しましたが、丸山古墳は間違いなく江戸時代に原形を失っていました。

ところで、この調査によって発見された遺物や件の大石のその後については、今日では皆目検討がつかない状況にあります。ことに大石については、調査のために撤去されたのか、検出状態のまま埋め戻されたのか、等々全く記録を留めていません。坪井の報告によれば、大石は

各辺が 1m を超え、多くが厚さ 80cm に達する巨大なものとあるので、容易に試掘坑の外へ出すことはできなかったと推測されます。未だに地中に残されているのではないかと。こうした疑問を抱きながら、平成 22 年 3 月に、港区教育委員会は、明治 31 年の試掘坑の位置と大石の存否確認を目的とする調査を、墳丘の破損を伴わない地中レーダー探査法を用いて行いました。

その結果、「伊能忠敬測地遺功表」（碑）の前、「瓢形大古墳」碑の前面付近で、長さ 3～10m、深さ 0.1～1.5m の埋め戻しの痕跡を確認することができました。残念ながら、大型石材の存在を示す情報を得ることはできず、埋め戻しと判断された土層の厚みも、試掘調査の掘削深度からすればはるかに薄いため、この埋め戻しの痕跡が明治 31 年調査時の試掘坑の位置を直接示しているとはいえません。しかし今から 110 余年前、埋め戻しの痕跡が確認された付近に、丸山古墳で唯一の試掘坑が穿たれたことは間違いないでしょう。

先般、学習院大学史料館は、同館に寄託されている阿部家所蔵の資料群の中から発見された 1 枚の写真（右下）を公開しました。ここには大石の上に立つ一人の男性が写されていますが、この大石こそが丸山古墳にかけられた幻の試掘坑内で発見された巨石であるのかも知れません。



写真は阿部正靖氏所蔵、学習院大学史料館寄託。なお本稿を執筆するに当たり、学習院大学史料館から多くの教示を得ました。明記して御礼申し上げます。

見て・さわって・学ぼう!! 夏休み事業報告

夏休みには小中学生を対象とした、①夏休み体験ミュージアム、②親子学習会、③夏休み学習会の3つの講座を実施しました。それぞれの事業内容を簡単に報告します。

①チャレンジ！縄文土器を作ろう

夏休み体験ミュージアムでは平成19年度から東京都埋蔵文化財センター（以下、文化財センター）との共催事業として、体験学習会を行なっています。

今年度は、多摩市にある文化財センターを会場として8月3・21日に縄文土器作りを行い、小学校3年生から中学校1年生までの子どもと、その家族の延べ76名が参加しました。

1日目は文化財センターの職員の指導を受けながら、遺跡から発見された本物の縄文土器をお手本に土器を作りました。

2日目は文化財センター内にある遺跡庭園で土器の野焼きを行い、きれいな赤茶色の縄文土器が焼きあがりました。土器を焼いている間には昔の火起こし体験や、復元された竪穴住居を探検するなど、縄文人の生活体験をすることができ、縄文時代についての興味がますます膨らんだようです。

②港区たてものウォッチング

～ステンドグラスを作ってみよう！～

戦前期の港区には、多くの洋風建築が建てられました。区内のたてものの洋風化は明治期の早い時期から進められ、さまざまな洋風建築を見ることができました。

今回の親子学習会では、洋風建築の象徴ともいえるステンドグラスに注目し、港区内に現存する洋風建築の紹介や、明治時代からステンドグラス工房が港区にあったこ

となど、ステンドグラスとの歴史も深い地域であることをお話ししました。

講義の後、親子でステンドグラスのライトを作製しました。ガラスの接着にハンダを使った本格的なものです。ほとんどの方が初めてのハンダ付けでしたが、全員無事に完成させることができました。ステンドグラスの作製を通して、港区の歴史や文化に対する理解を深めることができたと思います。

③ー東京湾 自然と人ー

『海が育てる自然の恵みと人の知恵

～東京湾の伝統漁業を学ぼう！～』

東京海洋大学海洋科学部附属水産資料館との連携事業として実施している夏休み学習会は、今年で6年目を迎えました。

今年は、8月19・20日の2日間にわたって開催しました。まず19日は水産資料館で「海の植物」である藻類について学び、海藻のしおり作りを行いました。

20日は当館で、浦安市郷土博物館の協力を得て、実際に使われていた漁具にふれながら東京湾の伝統的な漁法を学びました。

投網を広げてその大きさを体感したり、様々な漁具に施された漁師さんの知恵に驚いたり初めて知ることがたくさんありました。また、もやい結びなど4種類のロープの結び方も体験し、参加した子どもたちも楽しそうに学んでいました。

事業予定 (平成 22 年 10 月～)

特別展 江戸図の世界

会 期：10月23日(土)～11月28日(日) 会 場：港郷土資料館 《入場無料》

開館時間：9：00～17：00 (但、会期中の金曜日は 19:45 まで延長開館)

休 館 日：会期中の月曜日 (10/25, 11/1, 8, 15, 22)、および第三木曜日 (11/18)

◆ 展示解説 (事前申込み不要) 11 月 3 日 (祝・水)、23 日 (祝・火) 14:00～1 時間程度 ◆

★資料館講座「江戸図の世界」を実施します。江戸図とその歴史について学ぼう!!

日 程：11月5日(金)、12日(金)、20日(土) 会 場：三田図書館3階 集会室ほか

定 員：30名 ※要事前申込み (申込みの詳細は『広報みなと』10/21 号に掲載予定です)。

コーナー展

- ・「港区ゆかりの人物 - 齋藤茂吉 - 」 開 催 中～10月9日
- ・「指定文化財展」 12月11日～平成23年1月19日
- ・「愛宕下の武家屋敷跡2」 平成23年1月21日～2月16日
- ・「考古資料で見る近代史 (仮)」 平成23年2月18日～4月20日

講座など

- ・資料館講座「近代教育と港区 (仮)」 (全3回) 平成23年3月
- ・土曜体験教室「古代のアクセサリーを作ろう！」 10月2日・12月11日・平成23年2月26日

・各事業の詳細については、『広報みなと』または郷土資料館ホームページをご覧ください。

・当館の刊行物の一覧は、ホームページに掲載されています。販売は、展示室横の事務室で行っています。

事業報告 (平成 22 年 3 月～平成 22 年 9 月)

- ① コーナー展「愛宕下の武家屋敷跡」 2月19日～4月14日
- ② 本庁舎パネル展「愛宕下の武家屋敷跡」 2月26日～3月17日
- ③ 資料館講座「港区ゆかりの人物 - 齋藤茂吉 -」 (全3回) 3月12・19・26日
- ④ 土曜体験教室「古代のアクセサリーを作ろう！」 4月24日・6月5日
- ⑤ コーナー展「平成21年度 新収蔵資料展」 4月17日～6月16日
- ⑥ 古文書講座「古文書を読もう」 (全5回) 7月2・9・16・23・30日
- ⑦ コーナー展「芝家具彩色図 ～昭和初期の洋家具デザイン～」 7月2日～8月18日
- ⑧ 夏休み体験ミュージアム 「チャレンジ! 縄文土器を作ろう」 8月3・21日
- ⑨ 親子学習会「港区たてものウォッチング ～ステンドグラスを作ってみよう!～」 8月7日
- ⑩ 夏休み学習会「東京湾 自然と人」 (東京海洋大学附属水産資料館との連携事業) 「海が育てる自然の恵みと人の知恵 ～東京湾の伝統漁業を学ぼう!～」 8月19・20日

港区立港郷土資料館の利用案内

交 通 JR「田町」駅下車徒歩5分、都営地下鉄「三田」駅下車 (A3出口) 徒歩2分
都営バス「田町駅前」停留所下車徒歩2分、港区コミュニティバス (ちいばす) 「田町駅前」停留所下車徒歩2分、「田町駅西口」停留所下車徒歩3分

開館時間 9:00～17:00 《入場無料》

休 館 日 日曜日・祝日・第3木曜日

年末年始・特別整理期間

(特別展中の休館日は本頁上段をご覧ください)

※特別展前後特別休館※

10月12日(火)～10月22日(金)

11月29日(月)～12月10日(金)



『資料館だより』第66号

平成22年(2010)9月30日発行
編集・発行 港区立港郷土資料館

〒108-0014

東京都港区芝5-28-4

Tel. 03-3452-4966

Fax. 03-5476-6369

http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/muse/

刊行物発行番号 22091-7541